達、否、日本の行った色々な行為に対する償いという立場から、重い責任を引き受けてきたのに、という自負心は極めて無造作に打ち砕かれ、逆にそんな行動や苦労は、遠回しではあるが、自業自得という様にも言われて、骨身にこたえたものだった。

昭和二十九年、地元の製鉄会社に就職し、以来三十年その仕事一筋に頑張ってきた。これも、若い時に義勇軍で鍛えられたお陰だと感謝している。子供も結婚し、二人の孫にも恵まれ、今は家内と二人で静かに年金生活を送っている。

シベリア帰りと言っても色々な立場の人がいる今はただ懐かしさのみで多くの人々と会っているが、生き延びた古傷を秘めたまま語り合おうとしない人々も多い。色々と考えればさもありなんと思う。

戦争に生きた青少年時代

富山県　山田耕作

義勇団に応募の動機

私の生まれた東礪波郡平村は、通称五箇山と言う。最近は合掌造りが世界遺産といわれて有名になっており、平村も合掌造りの住居が多く観光客の絶え間がなく、にぎやかである。四周山に囲まれた庄川沿いの山村で、小学生のころは交通の便もすこぶる悪く、最寄りの駅までは二十キロメートルもの山道を峠越えしなければならず、冬場の半年間は雪の牢獄と言われる豪雪のへき地であった。夏は農業と養蚕が主な産業で、冬期間は夏場とれた繭の製糸、機織り、和紙作りで生計を立てていた。

私の家は比較的大きな農家で、小学校へ上がると傾斜の強い畑での仕事や桑摘みなどの手伝いをしていた。私たちの地方でも次男三男の多くは東京、大阪、

京都方面に丁稚奉公に行き修行の末に世帯を持つ人が多かったので、私も次男だから当然のことその運命にあった。

高等科二年の冬、私たちの学校にも満蒙開拓青少年義勇軍の募集要項がきて、先生から国策だから応募するようにと再三説明があった。続いて第一次、第二次に渡満した現地訓練生の生活の現況報告の冊子も届いた。私も家に持ち帰り繰り返し読んだ。そして果てしない広野、真っ赤な夕日の沈む地平線、トラクターで開墾に挑む若者、軍事教練に励む雄々しい姿等に強く憧れていった。「おい、こんな狭い日本よりも広い大陸に行こう」と、何人かの同級生と心を固め合った。応募のポスターには、「青年よ大志を抱け。人間至る所青山あり」と書いてあった。「そうだ、私たち少年も大志を抱こう」と、五人の同級生と応募を決意した。父母は大変に驚いた様子で私の顔をじっと見つめていた。こんな小さな子が、遠い満州へ行く決心をしたのかと思ったのだろう、ただ目に涙を浮かべるだけで返事がなかった。私の決心の強さに父母はそのことで話し合いをしている様子ではあったが、なかなか承諾してくれなかった。願書提出の期日がきたので、こっそりと印鑑を持ち出し申込書に押印して学校に提出した。父母は既に気づいていたらしく、良いとも悪いとも言わずに、うなずいて黙認してくれた。

三月の卒業式には校長から、「卒業生の中から五人が義勇軍に応募した。国策に沿い大陸移民を志したその勇気と精神は、実に立派である」と、強く激励された。

さあ！　義勇軍への門出だ

「昭和十五（一九四〇）年三月三十日、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所のため、三月二十九日正午に富山県庁へ集合せよ」との通達がきた。同時に役場からも、出征兵士と同様の赤だすきが届いた。それには満蒙開拓青少年義勇軍と書いてある。三月二十七日の晩には、親せきの人たちと同級生五人を、我が家に招いて送別会を開いた。山村のことゆえに、祖母や母の心尽くしの山菜料理と、どぶろく酒だった。めったに出すことのない黒塗りの高足膳で、私たちも許さ

れて酒を酌み交わした。同級生の中でも東京に出る者、名古屋に出る者がいて散り散りになり、いつまた会えるかの約束もできない。夜遅くまで少年たちの未来への夢は弾んだ。

翌朝八時、村の神社前で見送りがあるので、朝食には祝いの赤飯を頂いた。そして、両親が買ってくれた国防色の青年服にゲートル、編上靴に赤だすきを掛けるという、今まで経験したことのない正装に私の目は希望に輝いていたことだろう。神社前には同級生や、大勢の村の人たちが日の丸の小旗を手にして見送りに来てくれた。まず区長と、青年団長から励ましの言葉があり、そのあとの私の挨拶も、練習しておいたので意外と上手にできた。他の集落から来た四人と待ち合わせて、汽車の終点の城端駅まで峠越えをした。残雪まだ深い雪道を足ごしらえして送ってくれる父たちと四時間余り歩き、城端駅にたどり着いてそこから汽車を乗り継ぎ、富山駅に着いたのは午後三時ごろだった。その晩は旅館に一泊し、翌二十九日に県庁前に集合した。いよいよ父と別れての一人旅立ちだった。

県庁前には既に大勢集まっていた。私の身長は百六十一センチメートルで、普通だと思っていたが私より大きな子や、私よりもずっと小さな子もいたが、みんな私同様にまだ童顔の少年たちだ。なまりのある言葉が飛び交い少々戸惑っていた。やがて大会議場で郡別に整列、現地帰りの小隊長が紹介されてその指揮下に入った。壮行会が行われてから県庁前の石段で県の幹部の方との記念写真を撮った。これが最初で最後の全員での写真になるとは、だれも予期しなかったことだ。それから東京行きの夜行列車に乗り内原訓練所に向かった。東京行きは初めてで、同級生の五人は近くに集まって話に尽きず、時々止まる真夜中の駅には人影もまばらで、駅の看板を見ながら故郷から、富山から、次第に遠ざかり、汽車の鳴らす汽笛の音だけが寂しかった。

内原訓練所に入所

昭和十五年三月三十日、富山県の一行は内原訓練所に入所した。この訓練所は茨城県の水戸市から南へ約十二キロメートル、近くの内原駅から約一・六キロ

メートルのところの松林を切り開いて建設したもので、広さ約四十ヘクタール、中央が弥栄広場と称する広場で、その周辺を包むようにして松林の中に日輪兵舎が建ち並び、正面にひときわ幅大きな訓練所本部の建物があった。本部の傍らに望楼があって上に大太鼓が据え付けてあり、起床、礼拝、食事、作業始め、点呼、消灯まですべての日課がこの大太鼓とラッパを合図に行われた。日輪兵舎は、丸太に板囲いの杉皮屋根の簡素な建物で、一つの兵舎に一箇小隊約六十人を収容していた。建物を円形にしたのは簡易急速な建築に便利なためと舎内融和のためであった。当時は既に日輪兵舎が三百棟ほど建ち並んでいた。

私たちが落ち着いたのは本部に近い第十七中隊だった。一箇中隊は五箇小隊約三百人で編成されたので、富山県からの入所者二百十四人と群馬県からの六十五人との混成中隊となった。群馬県の人たちは二日早く入所していて私たちを出迎え、先輩気取りで世話をしてくれた。群馬の人たちは持ち前の「だんべい言葉」だからやけに荒っぽく聞こえ、国定忠治の生まれた在所だからやくざ連中のような印象を受けたが、慣れてしまうと大変さっぱりしたいい感じの人たちばかりだった。

中隊長は富山県出身の人だが、他の幹部の人は鹿児島の人、高知の人もいた。その人たちは幹部訓練所で教育を受け各中隊に配属された。私たちより十歳以上も年配の人たちで将来は現地訓練所で、また、開拓団移行後もお世話になる指導的立場の人たちである。富山から同行した小隊長は、第一次義勇隊として渡満した人で現地訓練所の制服の腕には白い腕章に赤線と桜のマークが入り『小隊長』と書いてあった。年齢も私たちより三歳ほど上だし、かっこうのよい勇姿に憧れもした。

内原の朝は太鼓の音で明ける。朝の礼拝の後は日本体操の『やまとばたらき』で、「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と」と、掛け声と共に行う古神道理論に基づく体操である。また、毎朝必ず行われるのは駆け足で、約四キロメートルは走る。中隊全員がついて行けるように遅く歩調をそろえて、中隊ごとに走る

様は訓練所全体に、「わっしょい、わっしょい」とこだまして壮観であった。それは厳しい開拓の困苦に耐える体力作りの修行である。

午前中は学科、教練、建築作業。午後は農作業または、開墾の実習が行われ、心身の鍛練のため直心影流法定の型によって重い木刀を用いて、「エイ、ヤア」と、気合いを入れることも教育の一つであった。食事は食事当番が配列した食事を前にして、「みたましずめ」を行い食前感謝の言葉を唱えた。献立も、一カ月分の予定表が出るので毎日何が出るか分かっていた。量も初めのうちは物足りないと思っていたが、慣れると意外に満腹であった。食器は主食の他に三個のアルミニウムで、食器洗いもすべて自分で行い、兵舎を出るときは必ず舎内に向かって、「山田、食器洗いに行って来ます」と言って報告する事が義務づけられていた。楽しみは三時の間食で、少しばかり甘みのある「マントウ」という蒸しパン一個だが、今もって忘れられない内原の味である。

晩には、一時間交替の不寝番が回ってくる。順番だからその日により起こされる時間は決まっていないが、夜中の不寝番は一番つらい勤務である。その他、月一回は衛兵勤務があった。特技訓練としては、士気を鼓舞する喇叭(ラッパ)鼓隊、畜産部、栄養部、醸造部、縫工部もあり、希望者はそれぞれその特技を身につけるために所属した。広場の片隅には相撲場があって中隊対抗の相撲大会も行われた。

私たちが入所してからも次々と入所する者が続き、三十箇中隊を擁する大訓練所となった。月に二回弥栄広場に全中隊が整列して、中央高台に立つ加藤完治所長の訓示を聞き、その後に分列行進があった。本部直属の喇叭鼓隊による行進は威風堂々と見事なものだった。そして毎晩のように兵舎の中で、『植民の歌』が高らかに歌われた。毎日の訓練生活にも慣れ、暑くて長かった夏もようやく終わりに近づく頃になると、関東平野特有の空っ風が吹き荒れて広場の砂ぼこりが舞い上がる。その頃に、ようやく私たち中隊の渡満の日と現地訓練所の名が発表になり、内原を出発する諸準備が始まった。

あこがれの渡満

渡満が近づくと何かと忙しくなる。渡満服の新品や編上靴、ゲートル、黄色の桜の紋章入りの略帽等が支給された。家から着てきた青年服も、縫い目が切れたり国防色も黄色くあせたが、五カ月の訓練に何とか耐えてきた。支給された渡満服を何度も着て実感をしていた。当面必要なものをリュックサックに詰め、残りは行李に詰めて梱包して内原駅までもっこで運んだ。『我らは若き義勇軍』と、自然に開拓の歌がもっこの揺れに合わせて口から出て足が弾んだ。予防注射を何回も受けた。

八月二十二日内原訓練所を旅立つ日がきた。幸い快晴だ。皆、一装用に着替えて背には飯盒と雨合羽の巻いたのを取り付けたリュックサック、肩から水筒を掛け、新しい鍬の柄を銃の代わりに担いだ鍬の戦士だ。私たちの心は既に大陸に雄飛し弾んでいた。午後一時、弥栄広場に整列し、壇上の加藤所長に対し喇叭鼓隊演奏のもとに敬礼を行った。そして加藤所長の訓示、「現地に行ったら腹をこわすな、風邪を引くんじゃないぞ、特に仲良くせよ」と、父親が息子を諭すような訓示だった。渡満する者の代表の答辞が終わり、喇叭鼓隊、日満の国旗を先頭に内原駅に向かって行進を開始した。内原駅には訓練所の幹部の方や、後続の訓練生も多く見送りにきてくれた。内原駅から東京に向かった。

東京駅に着いた中隊は早速に宮城前広場へ行進。初めて見る広大な広場、絵でしか見たことのなかった二重橋、皇居に向かって最敬礼、万歳三唱。その後青山会館にて休憩後、東海道線を夜行で伊勢へ向かい、二十三日は伊勢神宮参拝で、玉砂利の上を無言で、さく、さく、さくと、歩調をそろえて行進、神域の神々しさと大陸に骨を埋める覚悟の三百人の純潔に澄んだ心は、神の心に通じたに相違ない。その日は伊勢にて一泊して、二十四日はいよいよ郷土富山訪問の日だ。北陸本線で高岡に二十五日に着く。高岡市古城公園にて県主催の壮行会が行われ、矢野県知事、南高岡市長の激励の言葉の後、期待していた肉親との面会だ。父母は、県内でも一番遠い五箇山から会いにきてくれ

た。公園のあちこちで五カ月ぶりに会う一時を楽しんだ。満州に旅立てばいつまた会えるか分からない。家から持ってきてもらった餅を食べながら話は尽きない。いよいよ面会の時間が終わる頃、父は私に十円札を渡した。当時の十円は大金だったので、「義勇軍に小遣いをもらっているからいらない」と言うと、私のポケットに押し込んだ。「有り難いなあ」と、親の愛情をかみしめた。父母は、すぐに帰らないと今日のうちに家に着かないので高岡からすぐに帰ってしまった。

喇叭鼓隊を先頭に市中行進後、伏木港に向かった。私たちは早速に、三千トン級の射水丸に乗船したが、岸壁には既に歓呼の声や旗の波でいっぱいだった。大勢の肉親や見送りの人たちから五色のテープが船上に投げられ、私はわざわざ見送りに来てくれた高等科二年担任の石並先生のテープをもらった。午後四時、小雨降る岸壁から徐々に船は離れ出した。そのうちに、「ボォー、ボォー」と鈍く腹の底に響くような汽笛が鳴るといよいよ出航だ。『螢の光』のメロディーが拡声器から流れ出すと、見送りの人たちからも渡満する少年たちからも「わあ！　わあ！」と、歓声とも泣き声ともいい知れぬどよめきが続いた。「元気でね」「達者でね」「さようなら」と、しだいに岸壁を離れて、テープが五本、十本と切れて、やがて全部切れてしまうともう二度と祖国とも肉親とも会えないと思い、みんな大声で泣いた。もう見送りの人たちの顔の判別がつかなくなった時、中隊長は、「回れ右」の号令を掛けた。未練を断ち切る手段だったろう。私たちは伏木港を背にして十分間ぐらい過ごした。振り返った時には既に伏木港は霧に包まれて見えなかった。

終戦の混乱期に開拓団で自決した者、ソ連軍によってシベリアに連れて行かれた者、飢えや寒さによって凍死した者など、伏木での別れが本当に肉親と祖国との最後の訣別だった同志のことを思うと、船の上で泣いたとき、既に予感されていたのだろうと、あの時の様子を思い出すといたたまれない気持ちになる。

満州大陸への第一歩

伏木港を出航してから三日、初めての日本海横断の

船旅でかなりの船酔いが出たが、朝鮮半島の赤い山並みが見え始める頃には、船の揺れも少なくなりほとんど元気を取り戻した。いったん清津(セイシン)港に立ち寄りその後に近くの羅津(ラシン)港に昼ごろ上陸、開拓会館にて休憩し、粟飯を食べたが、船酔いで絶食が続き腹がすいていたのでうまかった。羅津から大陸列車にて北上。満鉄は広軌だから線路幅が随分広く、車両の幅も広い。横に三人掛けとなっていて網棚もハンモックのように大きく人間一人がすっぽり入れる大きさだった。線路の地盤も軟らかく、列車が通る度に線路が十センチメートルぐらいは下がっていたようだ。その反面、列車はクッションがよく静かで、日本のようにダイヤが過密でなく、駅と駅との距離も長く、駅を出る時も止まる時も緩慢で遅く、いつ発車したか停車したかわからない。汽笛の代わりに機関車の上の大きな鐘が「ガラン、ガラン」と鳴るのが合図だ。時間もルーズで、止まる駅ごとに時計が五分ほど違っていた。そんな事が災いしてか、ハルビン駅近くになって乗り換えのために下車準備の号令で、リュックサックを背負い通路の真ん中に二列縦隊で立っていたが、「ガシャン」という大きな音と同時に全員将棋倒しになった。列車の衝突だ。前の方から白い蒸気が吹き出す中、泣き叫ぶ声で修羅場と化した。幸いに私たちは下車準備のため通路にいたので二、三人のけが人で済んだが、原因は時間のルーズさからだった。私たちの列車がホームに入ってからその線路に入ってきた列車の機関車同士の側面衝突事故だった。ハルビン駅でけが人の入院に手間取ったが、また乗り換えて、見渡す限りの平原を約一時間ほど北上した。人家のない平原の真っただ中で列車が緩やかに止まった。こんな所で停車とは何だろうと外をみると、そこは黄色く色づいた甘瓜畑だった。青い服を着た乗務員三人が畑に降りたが、何と甘瓜を六、七個抱えて戻り、何もなかったかのように汽車は走り出した。甘瓜泥棒だ。一日に二、三本しか汽車が通らないので時間はいくらでも取り戻せるわけだ。何とも平和な別天地だ。ハルビン駅を出て八時間、北安省海倫県海北鎮駅に着いたのが九月一日正午過ぎで、ここが私たちの下車駅だ。めざす北満での第

一歩を踏み出したのである。

対店（タイテン）大訓練所に入所

海北鎮駅は町から少し離れた平野の中にぽつんと建つ線路が一本走っている小さな駅で、駅の近くに訓練所取次ぎの事務所兼郵便局があり、私たちが駅に降りると頭髪を伸ばした先輩格の訓練生が、てきぱきと世話をしてくれた。訓練所からは、対店義勇隊訓練所と書いたトラックが五台迎えに来てくれて、それに分乗して約三十五キロメートルあるという訓練所に向かった。後に遠ざかる海北鎮の町は満州特有の塀に囲まれているし、車の土ぼこりでその様子はよく分からないが、北満の大地は広く、行けども行けども広漠たる原野が続き、樹木もなく海の真ん中を走っているみたいだった。石一つない北満では道路の両側に溝を掘って土を盛り上げただけの簡単な道路だが、春先のぬかるみ以外は案外路面は滑らかで快適だ。少し上り下りの丘はあるが、まっすぐの道は地平線まで続いていた。

一時間ほどで左手に第一次渡満の三井小訓練所が見え、右手奥には昭和十三年入植の群馬村開拓団が見えた。私たちと一緒の群馬県の人たちは、一斉に手を振って歓声を上げた。ここから訓練所まで約十三キロメートル。なだらかな丘を幾つも越えて、午後三時頃に目的地の対店大訓練所に到着した。

内地を出るときは八月の半ばでまだ残暑が厳しくシャツ一枚で十分に過ごせたが、北満の九月一日は正に初冬だ。明日、防寒服が支給になるという。翌朝はもう霜で地面はばりばりになっていて、四ヵ月も季節が一足飛びしたようだ。秋の収穫もほとんど終わり冬支度の最中だった。二、三日は訓練所内の見学やら訓練生活の概要説明などで、夜は、内地への北満の第一報の手紙を書いた。電気もなくランプの下で、顔を寄せ合って思い思いを綴り夜を更かした。

対店訓練所生活

義勇軍は、関東軍の意向により義勇隊と呼ばれるようになった。当初、満州拓殖公社は、いくつかの大訓練所と小訓練所を開所したが、対店訓練所は大訓練所として本部事務所、講堂、加工場、病院、武道場等約三十の建造物があり、一箇中隊が活動単位で、兵舎六

十人収容のものが五棟に、中隊本部、講堂、炊事場、風呂場、便所、馬畜舎、牛畜舎、糧秣倉庫、兵器庫それに官舎があって、全部で二十箇中隊分三百以上の建物が並ぶ大規模な訓練所である。私たちは第三次義勇隊として入所したが、入所当時はまだ建設途上で先輩格の第一次中山中隊、第二次丹野中隊、第三次石沢中隊が先に入所していた。入所後間もなく第一次、第二次の血気の多い訓練生が、威張り散らし始めて、夕食後などに私たちの宿舎に木刀を振りながら怒鳴り込んできた。特に理由のない言い掛かりである。服従を求めているのである。彼らは先輩であり厳しい北満の生活の体験者で、年齢も上だし体格も良く、言われるまま服従せざるを得ない。それは現在問題となっている学生のつっぱり、いじめと全く変わらないことだった。

中隊長以下幹部、先生、小隊長などは内原訓練所当時と同編成で、一日の日課は冬期間は屋外作業は無理なので、朝の点呼、朝礼以外は開拓農業の学習、満語講座、軍事教練、薪の伐採作業等であった。特に大変だったのは警備で、交替で衛兵勤務について歩哨に立たねばならない。当時は匪賊が出没していて油断ができなかった。匪賊とは日本の満州移民に反対する武装グループで常にその襲撃には対処しなければならなかった。宿舎の長さは三十メートルほどの細長い平屋建てで、真ん中に一メートル五十センチ幅の土間の通路があり、両側が少し高くなっていた。床に黄色いアンペラが敷いてあり、両壁を頭にして寝る。枕元の上が棚で私物の行李が上げてあり本棚もあった。ペチカが二箇所にあったが舎内全体の暖はなかなかとれない し暗いランプが三箇所に下がっていて不自由な生活である。

酷寒の北満

対店訓練所の位置はシベリアに近い内陸部で、十一月ごろに四十センチメートルぐらい降った雪は、翌年の春まで解けることがなく、冬期間は寒いのであまり雪は降らないが、湿気の全くない雪はさらさらで、雪の上に座っていても衣服が湿ることはない。私たちのように北満の寒さに慣れない者にとって夜の衛兵勤

務、特に歩哨に立つのはつらいことで、三十分交替で防寒服や防寒帽に身を包み、顔の一部分しか出していないが、息するたびにまつげや鼻毛が凍る。物音一つしない原野は全く静寂そのもので、時折、狼の遠吠えが聞こえて不気味だ。夜間の監視方法は、顔を地面近くにつけて遠方をのぞくと樹木のない原野では空気が澄んでいて、約一キロメートル先の人影を確認することができる。歩哨の三十分は、始終歩いていないと凍えてしまう。また、冬場特に不自由なのは水である。井戸が水源だが、井戸は普通屋外に掘られているので、井戸の周辺は氷で盛り上がり滑りやすく水くみは困難を極める。朝の洗顔はほとんどできない。週一回の入浴の際に顔を洗う程度である。風呂の湯船は四角の板張りだが、湯の中は地獄風呂で湯加減は良いが、湯面から上の板囲いは氷が張っていて背がつけられない。もちろん湯船の外で体を洗うことはあり得ない。また、週に一回は便所当番が回ってくる。便所当番の道具はつるはしとスコップ、それにもっこだ。かちかちに凍った大、小便を掘り出してもっこで外へ運び出すのだが、その作業で忘れてはならないのがマスクである。口に氷がはいったら大変だからだ。できるだけ兵舎から遠い所へ捨てる必要がある。冬は凍っていて全く無臭だが、五月ごろになり雪解けが始まると同時に糞尿が匂い出すからだ。

冬場は水がないのでついつい着たままの日が続く。また、乾かす方法もないので衣類の洗濯もできない。これは日本人ばかりではなく、満人はそれ以上に不衛生だった。虱が体全体にわくと、下着の縫い目に無数の卵を産み付けるが、零下四十度以下の外に下着を干しても、虱や卵は死なない。手っ取り早い方法は下着を煮沸する方法だが、水が不自由な中では大勢の訓練生の分を処理することはできない。一番の難儀はかゆいことである。厚手の防寒服では上からかくこともできずにただたたくか、地団駄踏むことだけだった。さらに凍傷も問題だった。私たちは顔を少し出していても凍傷になりやすいが、現地人は素手で平気で仕事をしていた。日本人がこの地の寒さに慣れることは容易でないことをつくづく思った。

夏の農耕作業

五月になるとようやく地表が十センチメートルほど解け出すが、北満の農耕期は短いので早速開墾が始まる。砂利の全くない沃土は満州特有のぬかるみとなり、馬も、足も、農耕機も困難を極めるが、五月半ばを過ぎると気候も温暖になり土表面も乾き始める。畑の長さは約五百メートルだが、畦立や播種、土かけなど果てしない広野の大規模農業は作業能率もよく快適だ。砂利のない沃土は農作業用のトラクターをはじめ、鍬の先、除草機などの農具の先はすべて砥石で研磨して使用する。溝掘り作業もスコップの先を刃物の様に研いであるので、土は豆腐を切るように掘りやすい。石がないので刃が欠けることもない。肥沃な土地、病原菌の全くない土から収穫された作物も土中に障害物がないので、粒、大きさがそろい光沢もよく全くすばらしい出来栄えである。訓練生活を終えて開拓団に移行するとこの肥沃な土地が一人に二十ヘクタール配分される。まるで夢のように心が弾んだ。

夏は湿度が少ないので汗も出なく過ごしやすい。日曜日は休みなので沼にフナ釣りに出かける者、銃を背に狩りに行く者、故郷へ便りを書く者、満人の写真屋で写真を撮る者など思い思いで、厳しい冬とは反対に夏の満州はのどかで別天地だが、新聞、ラジオ、雑誌もない陸の孤島で、故郷恋しやで屯墾病になる者も多かった。

北満にも戦争の余波

昭和十六年八月、関東軍特別大演習ということで私たちも動員されて満州全域の駅に派遣された。私のグループ十人は、四平街（シヘイガイ）駅の鉄道警備に二カ月間勤めた。当時、内地から夜を徹して兵器、戦車、軍用自動車等が北満に貨車輸送された。満ソ国境警備強化のためか、中国方面への回送か、軍事機密で分からないが軍需物資が大量に輸送されたのは事実である。

勤務が終わって訓練所に帰って間もなく、十二月九日に中隊は全員集合の命令が出て講堂に集合した。中隊長から、「昨八日に、日本は米英に対して宣戦布告をすると共に、日本の爆撃機がハワイ島真珠湾のアメリカ艦隊を攻撃し破滅した」という説明を受け、未知

の緊張が一気に高まった。治安警備も厳しくなり、昭和十七年一月になって関東軍の海倫部隊から義勇隊の各小隊に下士官以下数人が配属され、酷寒の中での軍事教練の特訓が始まった。非常の際に、真っ先に徴兵ができて緊急事態に間に合うのは義勇隊だからである。そんな折りに私たち中隊でも年長の人たちは、徴兵適齢期となり兵隊検査を受けて入営する人が出始めてきた。

志半ばでの帰国

また待望の春が訪れてきて農耕作業に精を出し収穫も終わり、ここ北満にも再び酷寒と静寂が巡ってきた昭和十七年十一月のある日の夕食後、各小隊のペチカを取り巻いている少年の輪から歓声がわき起こってきた。それは私たちが夢にまで見ていた、永住地となる開拓団への移行が決まり、明日には先遣隊員の名前も発表されるということになった。

そんなときに、私に中隊本部から一通の電報が届いた。早速に開いてみると、思いも掛けない電文が目に入った。

「兄、死す、あと文」と書いてあった。つい先頃まで元気だとの便りをくれた三つ年上の兄の死が、なぜ起こらねばならないのか信じられないことで、戦慄が背筋を走った。四日後に速達で、その理由が届いた。兄は、横浜市の護国神社の建築に行っていて事故死をしたのであった。そしてその手紙の終わりに、家督相続のため家に戻って来いとあった。次男だったので相続の責任は感じていたものの、永住開拓地移行への喜びのなかで、私一人が中隊員から取り残されてしまった孤独感で放心状態になってしまった。帰国の手続きをとって約三カ月が経った昭和十八年一月末に本部から帰国が許可された。

二月二十三日の朝、海北鎮駅から出発することに決定し帰国の準備をすると共に、別れの挨拶に回った。志を同じくして今日まで苦楽を共にした兄弟たちだ。みんなは、私の帰国を心から惜しんでくれた。そして出発前夜に送別会をしてくれるという話が持ち上がった。酒は満州人と物々交換した「チャンチュウ」があるが、さかながないとのことで思案の末に思いついた

のが、小隊のマスコットの愛犬で犬汁を作ろうという話がまとまり、兵舎の真ん中に一斗缶の口を切って炊き出しの用意をする者、玉ねぎ、馬鈴薯を切る者などで、犬汁の野戦料理だった。かわいい犬のことは忘れて夜中まで別れを惜しんでくれた。

二十三日の朝、海北鎮駅に行くトラックの上は寒かった。荷物の間に体を潜め、次第に遠ざかる対店訓練所に、「さようなら！」「さようなら！」「さようなら！」を、何回も繰り返した。

満鉄、鮮鉄、関釜連絡船と乗り継いで城端駅に帰り着いた。北満の果て海北鎮駅から城端駅まで三十二円の運賃だった。

義勇隊で一緒だった桜井君の家に一晩泊めてもらい、桜井君の元気な様子や現地訓練所の様子を報告した。翌二十九日に庄川の連絡船を乗り継いで三年ぶりに我が家の敷居をまたいだ。

五箇山も冬の最中で積雪が二メートルほどで三年前と変わらなかったが、仏壇横の床の間には、兄の遺骨が安置されてあり花が添えられていた。こんなことで兄と対面するとは思ってもいなかったことで、涙がとめどもなく流れた。

第一回の徴用で造船所へ

戦争中は、軍の作戦遂行に必要な軍需品の生産のためにその労働力を民間から徴用していて、その人たちの家庭事情などにはお構いなしに、多くの人々は否応なしに駆り出されて、軍需工場等での生産活動や軍事施設の建設整備に従事した。いわゆる徴用工である。

昭和十八年三月末に、失意のうちに帰郷した私は、年老いた父と共に家業の農作業に従事していた。五箇山の頂上にまだ残雪があるころ、農作業の開始を準備していた。これからは、我が家の大黒柱として亡くなった兄の分も合わせて取り組もうとしていた矢先に、私にも徴用令状がきた。農業生産者は、ある程度は徴用猶予がされていたが、家には父もいたので応ぜざるを得なかった。

徴用先は富山市東岩瀬港に近い造船所の日本海ドックであった。神通川の川向かいに寮があり片道二キロメートルほど歩いての通勤である。朝夕、造船所入口

でタイムレコーダを押すのも初めての経験であった。

当時、造船所では一千トン級の海防艦を建造中で昼夜兼行の突貫作業だった。私は鉄木部に配属されて鉄板の組立が主な作業で一晩交替の夜勤が続いた。穿孔部で継ぎ目に穴のあいた二十ミリメートルないし三十ミリメートルの鉄板をクレーンで移動させて、船体を組み合わせ仮止めするまでの作業だ。その後は鋲打班の作業だった。鋲打ちの工員は小さなじょうごで、ひょいと器用に受け取り鉄板裏の人と調子よく鋲打ちをしていて、その職人芸のすばらしさに感動した。船体が出来上がるに従い、鋲打ちの箇所も随所に増えてそのすさまじい音は耳をつんざいた。その上に各所で電気溶接が始まりその閃光で目もくらみ、さながら戦場のようだった。目の痛みをこらえながら「夜勤は戦勝」の掛け声と共に懸命に続けた。約二年間、造船の仕事を体験したが、その間に三隻の海防艦が建造されて、そのたびに若い水兵が艦上に直立不動の姿勢で敬礼しながら出航していったのが印象に残っている。

連日の徹夜の突貫作業もむなしく一、二カ月後には、敵機により撃沈されたことが工場内でうわさされた。労苦の結晶であった海防艦の沈没には、もったいないという気持ちと、早仕込み教育を受けて軍艦に乗り込み、艦と共に海に沈んだ若い兵士の最期の心境はどうだったろうと思うとき、かわいそうだけでは済まされないものがあった。

択捉島（エトロフトウ）へ徴用、引揚げ

造船所の仕事にもやっと慣れて、独り立ちをしていた頃に突然、千島での飛行場設営のために、この平村からも数人の徴用が割り当てられた。家に残っているのは年老いた父だけが男手だったので、父を重労働に徴用させることもならずに、役場の理解と努力によって私が行くことになった。造船所の方は緊急な軍の仕事に従事するということで徴用解除という処置がとられた。

昭和二十年五月に高岡駅に集合、県内各地から乗り合わせた人たちと共に北へ北へと汽車や船を乗り継いで四日後に、やっと函館に着き函館港近くの宿舎に数日間の船待ちということになった。その頃にはもう、

北海道と樺太、千島列島との船による輸送は、アメリカの潜水艦の跳梁で思うようにならず、やっと乗船、出航したかと思う間もなく、港を出てすぐに雷撃されて沈没する例が少なくなかった。私たちは、もう命はないものと半ばあきらめ気持ちで船がくるのを待っていた。

やっと数日して三千トン級の貨物船に乗り込んだ。全国から徴用された人たちが、年齢も職業も様々な約二百人が乗り合わせた。私は自由の身だったが、中には一家の戸主で家業の大黒柱の人も多かったようで、本人が留守の間はどうなるのかと人ごとながら心配になった。

函館港を出航した日は快晴で、北海道の海岸線を楽しみながら日本海を北上し、二日目の朝に船が止まった。目的地には着いているが濃霧のために接岸できないと、船員が説明した。翌朝、少し晴れ間の出た間に上陸したが、そこは三日に一度太陽が拝めれば好天気と言われる濃霧の千島列島択捉島だった。

翌日から与えられた仕事は、軍用飛行場の滑走路の突貫作業の現場の土方作業だった。私たちが配属された組は、当時恐れられていた監獄部屋、通称「タコ部屋」とも言われている強制労働者たちの組である石川組だった。特に朝鮮人が多いなかに交じっての労働は過酷で実に耐え難いものだった。

石川組には大幹部と現場幹部がいて、いずれも目の鋭い一見してやくざ風の人たちで、その下に棒を振り回して人夫を追い回す役の人もいた。仕事の中でも一番の重労働は、トロッコ押しである。毎朝元気のいい若者を幹部が選び出していたが、徴用者からも半数以上が選び出された。私も若い者なので、毎日トロッコ押しに回された。作業内容は、滑走路を平坦にするために高い所の土をすき、トロッコを押して捨てる作業で、線路に十台ばかりのトロッコが連なっているが、能率を上げるため一番前と最後尾のトロッコに仕事に慣れた屈強な朝鮮人が配置されていて、仕事に慣れていない私たちを怒鳴っていた。一週間もすると、早く土を投げ入れるこつが分かった。それは動作の早さよりも、土の塊をいかに壊さずにトロッコに入れるかが

早くいっぱいになる秘訣で、だんだんと要領が分かってきた。さらに格納庫の建設も大きな作業だった。土をコの字型に四メートルほどに積み上げて、海上の敵艦から見えないように、飛行機を艦砲射撃から守るための仮設の格納庫で、人海戦術によるモッコ運びであった。しかし、上空からは丸見えであった。

八月十五日の重大放送や、日本が無条件降伏したことなど全然知らなかった。急にモッコ運びが中止になり、何も仕事をせずにごろごろと宿舎で寝ころんでいた。朝鮮人がひそひそと話し合っていることから、日本が負けたらしいということが耳に入ってきた。しかし信じられなかった。本当に負けたのかと半信半疑でいたときに、内地に帰る船が出るので出発準備をするようにと伝えられた。やっと、日本が負けて戦争が終わったことを知った。

出発準備といっても、私たちにはほとんど荷物はないのですぐに集まることができた。何としてでもこの船に乗って内地に帰らなければならないという気持ちだけで、他のことを考えるゆとりはなかった。気象条件の悪さと、過酷な労働と、食べ物の不足等で、三カ月の間に病死した人、病気で内地に送還された人が三分の一にもなったが、私は意外と強健で最後まで頑張れた。これも満蒙義勇軍で鍛えられたおかげであった。

やっと貨物船に乗り込んだ。一直線に日本海を南下して函館に向かうはずだったが、戦中に敷設された機雷が浮遊していて危険だというのでオホーック海に出て、そこから宗谷海峡を通って小樽に向かった。オホーック海では、あいにくと時化に遭遇して船は前後に揺れるばかりで前進できず、前に大きく傾くとガタガタとスクリューが空回りし、生きた心地がしなかった。せっかく今日まで命拾いをして故郷に帰れるというのに、こんなところで海の藻屑となるのは残念至極と、一時は覚悟をしたものだった。もちろんその間は食事も一切口に入らなかった。

小樽に上陸したのは、択捉島を出てから十三日目ぐらいで八月の終わりだった。北海道の海岸を一回りしたことになる。命からがら衰弱した体で、はうように

して帰郷した。まだその頃は、海外からの引揚者の受け入れ態勢も確立していなくて、自分の力だけで家に帰った。

私は、毎日の濃霧と、過酷な労働と、そのうえ外出が許されなかったので、択捉島の地形とか風景とかの鮮明な記憶はないが、北方領土返還が叫ばれている昨今、特に関心も深いし、もう一度択捉島に渡ってその景色を確認したいと思っている。

戦後の人生

戦後、私の村は木炭の年間生産量二十万俵、繭の生産高が八十トン、それに和紙などの販売も盛んで、私は知人の勧めで農業協同組合の職員となり農協の各部門を担当して、いろいろな経験を積んだ。当時は五十五歳定年制だったので、二十八年間勤めて退職した。退職した昭和五十五年頃からは、基盤整備が進み稲作が主流となり、養蚕もほとんど衰退し、その結果、過疎が進み若者の定住対策が村で叫ばれるようになった。私もまだ健康だし、第二の人生としてその対策に貢献しようと思い立ち、昭和五十七年に木工所を開設し、従業員十五人を雇用するまでに成長したが、バブル崩壊と景気の低迷で工場も縮小し、後継者に責任を譲り引退したが、十五年間にわたり木工業とその企業経営の貴重な体験もした。また、趣味として村に古くから伝承されている民謡保存会に、引き揚げてからすぐに入会し、尺八、胡弓を愛好し、五十五年もの長きにわたり保存伝承に努め多くの桧舞台にも出演した。

戦後の私の人生は、妻や子供、孫にも恵まれて、平和で、平凡で、幸福な余生を送っているが、十四歳で義勇軍に応募してから終戦までの六年間の短い青少年時代は、北満の酷寒での生活、海防艦の建造、そして択捉島での過酷な重労働など、二度と相まみえることのできない尊くも貴重な経験であった。その青少年期の大きな望みや苦労も敗戦によりもろくも崩れ去ったが、その体験が私の人生を心身共に豊かにしている要因で、この思い出は忘れずに大切にしてゆきたいと願うのみである。